

はしがき

なんでもそろそろ既製品、なんでもしてもらえる外部サービス、迫力満点でタメになる「おもいきりテレビ」や「ためしてガッテン」。——こんな時代に家庭科はいらない、という人がいるかもしれない。あるいは、授業にはりあいがなくなつたという教師がいるかもしれない。しかし、それは反対である。こんな時代であるからこそ家庭科は必要であり、先生たちにははりきってほしい。本書は、そのためのささやかな応援である。

ただし、「家庭科は生活に密着しているから大切」という、あまりに当然の常套句に安住しないほうがいい。衣食住などについて学ぶことと子どもたちが成長することがどう結びつくのか、このことについてねばり強く考えてほしい。そして、「家庭科が楽しい」という多くの子どもたちの声にこたえて、もっともっと楽しくするとともに、「楽しさ」の深い意味を探ってほしい。これが、筆者の願いである。

このような動機のもとに、まず、学校教育の制度（学習指導要領）と消費生活・家族生活の実態との両面から、この教科の主題をスケッチする（第一、二章）。

ついで、素朴な疑問に向き合う。「買えばすむものをなぜわざわざ作るのか」「家庭科には一貫する文化がないのではないか」「教科は役に立たなければダメなのか」「家庭科は家庭（家族）にどうこだわるのか」といった疑問群。「男が家庭科を学んだり教えること」に違和感をもつ人がまだい

るのではないかと思われるので、このことも疑問のひとつに加えよう。それぞれに根本的で、なかなかの難問であるが、少しばかり腰を据えて考え答えてみたい(第三〜七章)。

しょせん家庭科といわれるかもしれないが、されど家庭科である。知的刺激に富み、グッド・トゥー・シンクである。それだけにとどまらない。疑問にとまどい考えてゆくうちに、おぼろげながらも生活観や人間観がかたちをなしてくるので、思いきって整理してみよう。これをふまえるとき、いわゆる総合学習へのとりくみ姿勢や生涯学習の枠組みがほの見えてくる(第八〜十章)。

本書には、具体的な教材例が示されているわけではない。このことに不満を覚える読者には、ご寛恕を請うほかない。また、教育の現場は理想や理屈ではかたづかない、という意見も多かろう。実践の場合ならではの課題や毎日の多忙さと心労は痛いほどにわかるが、それにしても、何を思い何を見つめながら子どもたちや授業にかかわってゆくかについては反省しつつげねばなるまい。ともあれ、「私はなぜ家庭科を教えるのか」というきわめて大事なことがらについては、執拗なほどに論じているつもりである。また、いわゆる「生きる力」についても、多元多層で論じている。考えるきっかけにいただければ幸いである。

本書を、家庭科関係者はもちろんのこと、広く、他教科にかかわる教員や教育関係者の方々がお読みくださればと願う。そして、教科の人的意味をめぐる議論が活発に展開され、諸教科の底に通い合う教育の理念が探り当てられることをつよく願う。